
料理店ギルドへようこそ。

誰かの助手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

料理店ギルドへようこそ。

【Nコード】

N2004BA

【作者名】

誰かの助手

【あらすじ】

異世界とかさ、本当に存在していると思う？ 漫画とか小説の話なら、ただ作り話だしそりゃあると思うよ。でも、現実には？ 私の答えは、そんなものないに決まってる。だって現実にあったら、それこそ話題にでもなっただ目されてるはず。しかしそんな話今まで生きてきた中で1度も聞いたことない。だから、これからも今まで通り、何もなのまま普通に過ごしていけるはずだった。何故あの時あのような行動をとってしまったのか、今の自分でもわからない。でもその行動によって、普通に過ごしたいと思っていた自分

の未来を自分で変えてしまったことは、嫌でも受け入れないといけない事実だった。前回描かせて頂いていたものをもう一度書き直させて頂いてます。……1部、1部が長いいため、縦読み推奨かもしれません。今のところ、会話文少な目となっております。

1・00・プロローグ。(前書き)

時間的な問題があるため、一気に1話更新ができません。何日かに分けて1話更新が多くなると思いますが、ご了承ください。

1・00・プロローグ。

彼女は求めた。

いつも通り普通に平和に、これからも過ごしていけることを。

彼は求めた。

狭い部屋に閉じ籠ったままの普通から、抜け出すことを。

神は言った。

普通なんてもの、この世に存在していない、と。

「普通って一体なに？」

このようなことをいきなり聞かれて、ちゃんとした答えを出せる人はいるのだろうか。

もちろん私には無理だ。そもそも普通といっても、その普通という単語の内容自体が個人によって違うため、模範解答を出せなくて当たり前。

私にとっての普通は、強いて言うならば今の生活そのもの。

毎朝早くに起きて、勤め先である料理店に出向き、料理を作って接客したりして、そして夜になっただら寝る。そんな感じのことの繰り返し。

別にこの生活に不満があるわけではない。むしろ満足しているといてもいいほどだ。

職種によっては自分の身を削ってまで街の外のあらゆる場所に生存している、凶暴な魔物と戦わなくてはならないという場合もあるし。それに自分の命を危険にさらしてまで、他人のため戦う意味がわからない。人間、誰でも自分の命が1番大事だし、自分にメリツトがなければ面倒事なんてやろうとも思わない。

こういう自分を中心とした考えを持った人間のことを、世間では“自己中”というらしいが、これも人間にとって普通だと私は考える。いや、これは人間に限らず、この世に生を受けているもの全てに当てはまるのではないかな。

例えとして、自分が何か得体の知れない敵に襲われそうになっているとする。敵の大きさは自分より大きく、武器は……まあ適当に鋭利な刃物、包丁とかでいいかな。とにかく攻撃されたら一溜りもないものってことで。で、敵の情報をまとめると、大きな図体とよく切れそうな包丁を持っている敵が、今にもこっちに襲いかかってきそうである。対抗して戦うにしても、自分に武器はなく、素手で対抗するわけにもいかない。逃げるにしても、敵の素早さも測定できないため、全力疾走をしても捕まるかもしれない可能性も。

そして、ここであることに気が付く。

ふと隣に目を向けてみれば、自分と同じように武器を持っていない、抵抗のしようのない見知らぬ人間がもう1人。しかもその人は腰を抜かしているため、走って逃げることは不可能な絶体絶命という状況。

ここで1つ、生き延びるための条件を加えてみる。

“どちらか1人が犠牲になれば、もう1人は確実に逃げるこ

出来、助かる”という条件を。

条件と隣にいる人の状況も考えて、そこで表れる選択肢は、考えずともこの3択に絞られる。

- 1、腰を抜かしている人を担いで、一緒に逃げる。
- 2、腰を抜かしている人を置いて（その人を犠牲にして）、1人で逃げる。
- 3、自分を犠牲に、腰を抜かしている人を助ける。

どれを選ぶかなんて、答えは見えているでしょ？

正義感とか無駄な考えは抜きとして、自分の命が大事なら3を選ぶことはまずない。赤の他人のために、自分の命を犠牲にするとか何のメリットもないしね。

次に1の選択肢。人1人を担いで逃げるということは、担がれる人の体重にもよるが、結局軽くも重くもその分逃げる速さは少なからず減速する。敵の素早さを測定出来ない以上、捕まる可能性は高い。運が悪ければ2人とも捕まっては、お終い。

となると、残るは2番。これが最も助かる確率の高い選択肢。こんな状況に陥ったら、私は迷わず2番を選ぶだろう。

理由？ そんなもの、分かりきっている。

何回も言うけど、自分の命が1番大事だから。

脳内ではもう1人の人も一緒にとか思っても、そんな考えは一瞬で消え去る。生き物なんて、命が危機的状況に晒されたら本能的に“自分だけでも助かりたい”って思うのが普通だ。それに加え、本能が恐怖心と焦りで煽られ始め、最終的には自己中心的な考えしか出来なくなる。

詰まる所、結局生き物なんて1番自分が大切なのだ。そう考えるのが普通であり、その逆の考えを実行する人がいるのなら、悪い

けど私は馬鹿なんだとしか思えない。

今もこれからも、そう思っているだけのはずだったのに。

私は今まさに、自分の普通をぶっ壊すような行動をとってしまった。
ていた。

先ほどの選択肢から、今の状況に1番近いものを選ぶとしたら、
それは1番最悪なもの。

自分を犠牲に、赤の他人を助ける。

考えたくもないある単語が、頭の中を猛スピードで駆け巡ってい
く。

そう。これから私の身に待っているのは、予想せずとも“死”の
一文字だった。

1 - 01 ・ 暗雲の兆し。

今思えば、今日は朝からおかしな一日だった。

いつもなら目覚まし時計が鳴る前に起きることが出来るはずの朝。しかし今朝に限って起床を促す時計の爆音が鳴っていたことにすら気が付かないまま、案の定寝坊。勤め先である料理店のマスターが時間になっても出勤してこない私を心配してわざわざ様子を見に来てみたら、まだふかふかのベッドの上で爆睡中の私がいたと。もう本当に申し訳ない。

とりあえず急いでベッドから飛び起き、朝食はいつもながら摂っていないためスルー。出勤の準備は昨晩のうちに済ませておくのが私のやり方のため、歯ブラシを口にくわえたまま着替えを行う。寝間着を急いで剥ぎ、黒いＴシャツを一気に被る。

途中、歯ブラシに引っかかって「うごっ!？」と情けない声をあげてしまったことは、誰にも聞かれていないし大丈夫としよう。

口の中に残る鈍い痛みを我慢しながら、裾が短く薄い茶色のカーゴパンツに急いで足を通す。そして、ハンガーに吊るしてある上着を手に取った。前が開いており、裾が膝丈の長さまである長袖の白いローブに腕を通すと、胸元で軽く交差させ、その上から腰元を赤い帯で緩く縛る。この羞恥心の欠片もない着替え方に、一応女という性別を受けている私は女を捨てていると言われても過言ではないま、言われても気にしないけど。

とりあえず着替えは終わらせ、身だしなみ確認のために洗面所に立てかけてある鏡の前に立つ。そして右手で歯ブラシを掴むと、口を閉じて歯茎から血が出そうな勢いで高速移動させた。その間に空いている左手で、肩までの長さしかない茶色の髪を整える。

そこで嫌でも目に入るのが、前髪の生え際から一本だけ天に向けて存在感を掲げるアホ毛。どうもこれは生まれつきの癖毛のようで、何回直そうと足掻いても、直せた例がなかった。だからもう長年の

相棒と諦め、そのままにしている。だからといって、本心にはやっぱり直したいという思いが残っているせいか、アホ毛を目の当りにするたびに口からは小さくため息が漏れていた。

「9時になりました！　では、今日も毎朝恒例の属性別占い、行ってみましょう！」

はい？　今何時と……？　え？　9時？

アホ毛に気を取られて、寝坊したということをお忘れかけていた私の耳に流れ込んできた、ニューズ番組の女性の声にはつとずる。

料理店の開店は午前9時。仕込みやホール内の清掃など事前準備があるため、スタッフはいつも開店1時間前の8時には出勤していなければならない。しかし今の時刻はテレビの時報によると9時ということ……。

「……かんっべき遅刻じゃん」

未だに加えたままであった歯ブラシを口内から引っこ抜き、急いで口をゆすぐ。雑な磨き方のせいで、右上の八重歯付近の歯茎からちよっぴり血が滲んでいた。口内に広がっていく、苦いのか酸っぱいのかよくわからない鉄の味と例えられる味覚を、一気に飲み込むうん、不味い。

駆け足で洗面所を出た私は、占いの流れ続けているテレビのあるリビングへと急いだ。テレビの前に置いてある長方形の机の上からリモコンをひったくるように手に取り、そのまま電源ボタンへ指を伸ばす。

「属性のあなた！　今日の運勢は絶好調！　何をやっても、大抵のことは上手く進むと考えて良いでしょう。でも……」

私たちの住んでいるこの世界は一般的に「オリュミオン」と呼ばれ、人間一人ひとりに生まれつき属性という、まあ簡単に言えば得意不得意を現すものが身体の中に備わっているらしい。らしいという不確かな表現はあまり好きではないけど、何せ属性の備わっている場所というのが心臓の中とかどうとかで、確かめようがないから仕方ない。そんな身体の中身を調べられるような機会など、平和の中で暮らしている庶民にはなかなか来るわけがないし。

そして属性の単語が来れば、必然的に浮かぶものが魔法という生活を助けるための能力だ。その能力を持つ人間も世界中に多数いるが、書物によればあくまで個人の得意不得意の問題なので、扱える魔法に属性はほとんど関係ないとのこと。あるとすれば威力や効果にといったところか。

魔法の平均威力を1とした場合、自分の属性に合った魔法の種類なら威力が1.5倍になったり、逆に自分の属性と対となる種類の魔法だと、威力は通常の半分に下がったりする。

例えば、自分の属性を火とすると対となる属性は水。地の属性だとすれば空という感じ。とは言っても、この世界にいくつの属性があるのか私自身把握していないから、断言することは出来ない。

まあ苦手分野の属性魔法であっても、本人の努力次第ではどうにかなるようだ。

丁度自分の属性の結果が放送されているところだったが、時間がないため最後まで聞かずに電源を落とした。運勢が絶好調ということとはわかったけど、しかし占いなんて信じていないのが私。いや、でも良い運勢なら信じてやってもいいかなー、なんて都合のいい考えは頭の隅に置いておき、玄関へと走った。

一歩間違えれば壊れるんじゃないかと思うぐらい、思いっきり玄関の艶のある木で出来た扉を開く。扉はいつになく大きな悲鳴を上げていたが、今はそんなこと気にしている暇がない。帰ったら壊れてないか確認するから今はそのまま我慢しておいて、と心の中で呟いておいた。

室内から助走をつけて走っていたせいか、足はそう簡単には止まりそうにない。まあこのまま料理店まで止まらせる気はないけど。しかし外に出た次の瞬間、落ち着かせるつもりはなかった足は考えとは裏腹に、ゆっくりと両足とも地に着いたままの状態になってしまった。

原因はいつもと違う外の雰囲気。なんというか、一言でいうと暗い。今はまだ朝のはずなのに、外はすでに夜になる直前のような薄暗さをしていた。

えーと……。もしかしてまだ深夜だったりする……？ いやいや、でもマスターは朝だって言いながら起こしに来てくれたし、朝には違いないだろうけど。それにしてもこれは暗すぎるというか……。てか私が今日起きられなかった原因って、まさかまだ外が暗かったせい？

周りを見てみれば、洗濯物をタライの中に入った水につけたまま、街の奥様方が心配そんな顔を浮かべながらもいつも通り井戸端会議を繰り広げていらっしやる。そこら辺を走り回っている子どもは、いつもと違う朝に興奮を隠せないようで、魔物鑑賞園によくいる、群れて騒ぐことが大得意な猿科の魔物のような甲高い声を上げて騒いでいた。って、こんな人間観察なんてしてる場合じゃない。

目的を思い出し、止まっていた足を再び全力で動かし始める。

私の働いている料理店は街の中心に位置しており、街に一件しかないからなのか、平日も休日もいつも賑わっていた。しかし、この街は人口100人以下という街というよりは村に近い状態。しかもこの街に住居がある者は、忙しくて食事の準備が出来ない家庭を除いて、普通は自宅で食事は摂る。

ではなぜ、そんなに客の出入りがいいのか。

その答えは、料理店と同店内に構えられている、ある組織が関係しているから。

「すみません！ 遅れましたー！」

民家に比べて少し大きい、レンガで出来た建物の扉を勢いよく開ける。開けた瞬間、嗅覚を刺激するものは、肉料理に使われている当店オリジナルのスパイスの匂いと、少々きつい酒の匂い。天井に数個吊るされた淡い黄色のランプによって、落ち着いた雰囲気が漂っている店内を見回してみれば、まだ朝だというのに酒の力によって出来上がってしまったっている人も何人かいた。

「おう、やっと起きたか。お前が寝坊たあ珍しいこともあるもんだな」

奥にある厨房と店内を唯一繋いでいるカウンターからひよっこりと顔を出して笑う、黒髪の短髪と顎髭がよく似合うおじさん。180センチはあるであろう身長に、たくましく鍛え上げられた四肢が白のコック服から姿を覗かせている。料理店に髭は不衛生だと思われがちかもしれないけど、この店のオーナーであるバジルさん本人は、全くと言っていいほど気にしていない。それにお客さんもこれといって気にしているわけでもないようで、中にはバジルさんの髭を褒める人もいた。

「本当に申し訳ないです。厨房、入ったほうがいいですかね？」

「ああ、頼むよ。何故か今日はこの時間帯から酒を注文してくる客が多くてな。料理と酒の準備を一人でやるには、結構きつかったんだ」

店内では必ず着用するようにしている、オレンジ色のバンダナで髪を包みながら、バジルさんから放たれたその言葉に寝坊してしまつたことを、また深く後悔する。嫌味を言うような人ではないといふことはわかっているのだけど、自称ガラスのハートの持ち主である私の心に、ひびが入ってしまったような感覚が。こういう日に限

ってなんで寝坊なんてしてしまったんだか……。

厨房に入る準備をしながら、こうなったのも全ては朝になっても暗いままの空のせいだ！ と、心の中で小さく八つ当たりしていたことは私だけの秘密。

昼を過ぎると、午前中から飲み続けているお客さんの大半は酔いつぶれて睡眠時間へと入る。その寝ている場所が、まだ店内のテーブルの上ならまだ良いけど、床の上となると失礼だが結構邪魔。空いた食器を片づけようとして厨房を抜けてホールへと出てみると、床のあちらこちらに人、ひと、ヒト。この光景も見慣れたもので、店のスタッフも他のお客さんも気にすることなく仕事や食事を続けていた。

そんな状況の店内で注文も少なくなってきた頃、スタッフは時間を見計らって交代で休息に入ることとなっている。

私はいつも13時から15時までの少し長めの休息を貰っているため、この時間は昼寝にあてることにしていた。

だって眠いんだもの。3度の飯より睡眠とは私のためにある言葉。その昼寝を行うためにも、この街から少し離れたところに昼間は魔物が出ることはない小さな森があるのだけど、今日も迷うことなくそこに行く予定だ。

「休息入りまーす、昼寝行つてきまーす」

「はいはい……って、ちょっと待ちなさいロゼル」

休息に入ろうと声出しをしたところ、誰かがマスターの奥さんであるアンナさんに呼び止められた。明るい茶色をした腰まである長

髪を頭のとっぺんで一結びし、その髪の手先を指でクルクルと巻きながらこちらに向かつてくるアンナさんは、いつも笑顔を決やさない女性である。現に今も両目を吊り上げて……。

あれ？ この表情は、もしかしなくても怒っていらっしやる……？

なんとなくアンナさんの背後に黒いオーラらしきものが見えたような見えなかったような気がしたため、早々とこの場を去ることに。あの人はよく怒ったり笑っていたりと忙しそうに表情を変えるけど、黒いオーラが見えるほど怒ることは滅多にない。今まで見てきた中で怒っていたときと言えば、バジルさんと喧嘩していた時ぐらい。何度呼びかけても自室から出てこようとしないため、ホルルの仕事の大半をこなしている彼女がいないときは本当に忙しかった。

しかし今回はバジルさんと喧嘩をしているわけでもないようだし、何故あそこまで怒っているのだろう。

「ローゼール、あなたまた朝ごはん食べてこなかったわね！？」

朝を抜くと一日やる気出ないっていうでしょ！」

「ロゼルってどちら様ですかー」

「あなたしかいないでしょっ！ こら、話聞きなさい！ あと今日は森に行くー！」

ちょっとめんどくさいことになりそうだったので、捕まる前にさっさと逃げることにした。心配してくれているのは嬉しいけど、今日は寝坊したから本当に食べてる暇がなかった。いやまあ、いつも食べてこないけど。

後ろを振り返ってみると、追いかけてくる様子もなかった。多分言っても無駄と理解して、すぐに店の中に戻っていったのだろう。あまりしつこくないアンナさんの性格に感謝。ありがとう。

少しでも長い昼寝時間を確保するため、駆け足のまま街の外へと飛び出す。

外は朝と変わらず、未だに暗いままだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2004ba/>

料理店ギルドへようこそ。

2012年1月6日00時49分発行